

Title	マルコ・ポーロ翻刻版解説(石見銀山世界遺産登録記念)
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81448
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



neza de entrarem em hũa sua propria naao carreguada de desuayradas riquezas e mercadorias. Ventando boõ vento e guyandoos Deos se foram pera a çidade de Constantinopoli(folha v)

¶ Começase ho Liuro Primeiro de Marco paulo de Veneza das condições e costumes das gentes e das terras e prouincias orientaes. E primeyra mente de como e em que maneyra Dom Marco paulode Veneza e Dom Maffeouseu jrmaão se passaram aas partes do oriente. Capitulo. primeiro. o tempo que Baldouino Rey guernaua ho emperio de Con stantinopoli. E esto foy no Anno da encarnaçam de nosso sen hor Jhesu christo de Mile du zentos ecinquenta annos. Dous nobres honrados e prudentes jrmaãos.çidadaãos e morado res da muy nobre çidade de Veneza poendo por seu acordo no porto da dita çidade de Ve neza de entrarem em hũa sua propria naao carreguada de desuayradas riquezas e mercadorias. Ventando boõ vento e guyandoos Deos se foram pera a çidade de Constantinopoli (folha v)

翻刻版(1922年, リジュボア, 国立図書館(Biblioteca Nacional)所蔵, 請求番号 431 V)より

(翻訳) 東方の人々の諸状況、習俗及びその諸地域、諸国に関するヴェネチア共和国のマルコ・パウロ[ポーロ]の第 1 巻がここに始まる。まずヴェネチアのマルコ・パウロ[ポーロ]氏及びその弟マテオ氏がどのような状態でまたどのような方法で東方の各地にたどり着いたかについて語る。第 1 章。皇帝バルドヴィーン[ボードゥアン2世(在位: 1228 年～61 年)] が東ローマ帝国コンスタンティノープルを統治していた折、我が主ジェズ(ス)・クリスト降誕暦 1250 年のことであった。まことに高貴なるヴェネチア共和国の市民にして住民である 2 人の兄弟はまことに賢明で分別があったが、ヴェネチアの港で相談した上で、[以下次頁冒頭数行]大型ナウ船に様々な財宝・商品を積み込んで、順風を受け、神の御加護と導きによって、コンスタンティノープル市に向かって出帆したのである。(…)

(表紙)

Marco Paulo.

¶ Ho liuro de Nycolao Veneto.

¶ Ho trallado da carta de huu[m] genoues das ditas terras.

¶ Com priuilegio del Rey nosso senhor. que nenhuu[m] faça a impressam deste liuro. nem ho venda em todollos seus regnos e senhores sem licença de Valentim fernandez so pena conteuda na carta do seu preuilegio. Ho preço delle. Cento e dez reaes.

(翻訳)

マルコ・パウロ(ポーロ).

¶ ニコラオ・ヴェネト著作.

¶ 上記各地に関する一人のジェノヴァ人の手紙の翻訳.

¶ 我が国王の授権勅許状(印行許可状)の下、ヴァレンティン・フェルナンデス※の許可なく勅許状にある罰則を科すことを以って、何人にもすべての王国・領土においてこの刊本を印刷することも、販売することも認めるものではない。この刊本の販売価格は 110 レアルである。

※ヴァレンティン・フェルナンデス(～1519年)はモラヴィア(モラバ、現チェコ共和国)出身で、15世紀末リジュボアに定住した。「ドイツ人」と綽名され、1503年マヌエル国王からドイツ向け香辛料取引きの市場公証人(仲買人)の勅命を受け、リジュボア市場におけるドイツ人商人の公証人にも任命された。一方、文藝庇護王妃レオノール(1458年～1525年)お抱えの印刷業者として、多くの出版を手がけた(編集、翻訳、執筆)。中でも当時の大航海時代の世相を反映して勅命で翻訳出版した『東方見聞録』(1502年刊)は有名であり、著書『ヴァレンティン・フェルナンデスのマニユスクリプト(稿本)』は大航海時代の航海(記録)文学の代表作とされる。

この翻訳は、フランチェスコ・ピピノのラテン語訳本(14世紀)を底本としているが、このラテン語訳はヴェネチア方言訳本を原典に節略したもので、異本は最大数の62種に及び、中世欧州で最も広く流布した。国王ジョアン2世はこのピピノ訳ラテン語写本をローマから取り寄せ、次代国王マヌエルはこれを王室蔵書に加え、現在国立文書館(王室史料158番)に所蔵されるが、1502年ヴァレンティン・フェルナンデスに命じて翻訳上梓させた。

なお上記リジュボア国立図書館刊翻刻版一部は、当時図書館長ジョルジ・コウト氏より県立古代出雲歴史博物館に寄贈・所蔵されている。石見銀山世界遺産登録記念「特別展示」(2007.7.14-9.24)において、『東方見聞録』翻訳原本は貸し出され、マルコ・ポーロ好きの日本人趣味を刺激し、一時期展示閲覧に長蛇の列が出来るほど、静かなブームとなった。

大航海時代のポルトガルルネサンスと世界遺産・石見銀山、それぞれの文藝庇護者

大阪外国語大学教授、石見銀山展展示検討委員の
林田雅至さんから

6月28日逆転激闘と評された世界遺産登録にまさに水を得た魚の如く、石見銀山展の現場は息を吹き返した。疾風迅雷、土壇場準備の2週間を駆け抜けたスタッフは、梅雨末期の暴風雨を吹き飛ばすように、内覧会・展示会オープニングで遠来のポルトガル人学芸員らを歓迎、ここ石見の文藝庇護(ひご)者(中村プレイス代表中村俊郎)が主催する元山陰合同銀行大田支店建造物(鹿鳴館時代)におけるレセプションで参加者は美酒に酔いしれ、出身地の民謡を披露するなど、あちこちで歓声が沸いた。



16世紀大航海時代というバブル景気に沸き立つ人口30万を抱える大首都リジュボア(リスボンのポルトガル語読み)に君臨する国王マヌエル1世は、記念碑的な『東方見聞録』のポルトガル語翻訳を命じたが、世界に2部現存するのみの稀版本1部を本邦初公開した、元カモンイス研究機構(国際交流基金に相当)総裁ジョルジ・コウトを館長とする国立図書館の学芸員ら、また宗教祭礼に用いる銀器を主として出品したポルトガル国立古美術博物館の褐色の美貌の館長ダリャ・ロドリゲスは、旬の刺し身を慣れぬ箸さばきではお張り、舌鼓を打つように見え、楽しく得意げに隣りも交え、会場を和ませてくれた。

シリコン義肢・義足で世界市場に君臨する中村代表の舌は滑らかで、両足を失ったモンゴル少年を救い、成長した彼は教育投資の恩に報いるべく現地大学の日本語学科で日本語・日本文化の奥

「朝日 21 関西スクエア」第 97 号掲載(2007)

会員消息
伝言板

義を窮めようと懸命と誇らしげに語る国際平和活動にも余念がない石見銀山登録推進の立役者である文藝庇護者はこの夜ことのほか上機嫌であった。一方、国王マヌエル1世の後継者、ポルトガルルネサンスを開花させた文藝庇護者ジョアン3世の鑄造した十字架貨幣に刻まれた《IN HOC SIGNO VINCES》(この印もて勝利せよ)であるが、4世紀ごろ、ゴルゴタの丘で、ローマ帝国でキリスト教を公認したコンスタンティヌス大帝の母聖女ヘレナが十字架を発見し、十字架伝説は誕生した。大帝の奇跡物語は蛮族撃退に際して天使が夜中彼の頭上に現れ、「この印もて勝利せよ」のお告げを授かり、見事に敵を敗走させ、キリスト教に改宗したと伝える。この標語をもって、十字軍、レコンキスタ(国土回復運動)、極東アジアへの進出は達成された。

インド西海岸とリジュボアを結ぶ香辛料・中南米銀などを交換する物流貿易は余りにも有名で、植民地交易の典型例であるが、教皇庁は布教保護権(Padroado)をポルトガル国王に認めて、遠隔地極東布教区の支配権を貿易と一体化して推進させることになった。その地域のモンスーン貿易で重要な役割を演じたのが石見銀である。中国大陸で倍額売却された和銀は目玉商品であった。こうしてこの地域で貿易が隆盛を極めれば極めるほど、ポルトガル海洋帝国の「布教と貿易」という大車輪を担う存在として注目され続けたのである。石見銀山が大航海時代の交易を証明する文化遺産の側面を補強するためにも、今後この貿易を詳細に物語る文書のさらなる発見は大いに求められる。

◇世界遺産登録記念「隣きふたび石見銀山展」は、今年3月に出雲大社の東隣にオープンした島根県立古代出雲歴史博物館と、大田市の石見銀山資料館の2会場で9月24日まで開催中＝写真右は展覧会図録の表紙。



大航海時代のポルトガル・ルネサンス

— 林田 雅至

まず、右側の図版を解説しよう。最盛期の海洋帝国に君臨した国王マヌエル I 世(在位:1495年～1521年)が使用した時祈祷書の挿絵。在位中ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見(1498年)、カブラルによるブラジル発見(1500年)があり、首都リスボン(リジュボア)にはアジアの香料、アフリカの金、マデイラ島の砂糖が流入し、これらの富を背景に絶対王制を確立した。富の象徴として挿絵外側の縁に当時鑄造された歴代国王の金銀貨幣、宝石が配置される。またこうしたキリスト教美術図像は一般に時代錯誤的で、ここでは実際のキリスト生誕の時期を考慮せず、挿絵が制作された時代背景を反映し、アフリカあるいはブラジルの原住民の姿を博士同行者の一人として描いている。

いくつかの貨幣について見てみると、左側外縁の上2種類の金貨はカトリック両王、アラゴン王フェルナンド2世(在位:1479年～1516年)とカスティーリャ女王イサベル(在位:1474年～1504年)の肖像を刻印したものである。次の列に並ぶのはマヌエル1世10レイス銀貨。その下に縦列で表裏が重なるのは、アフォンソ5世(在位:1438年～1481年)鑄造の十字架金貨。彼の治世下、都市商人層の支持基盤で西アフリカ進出を積極的に進め、アフォンソは「アフリカ王」の異名をとった。晩年カスティーリャ王位継承権問題に介入し、79年イサベルの権利を容認した。その下はジョアン2世(在位:1481年～1495年)の十字架レアル銀貨。この国王は黄金海岸に商館を建設し、金取引を本格化して、ここを拠点にアフリカ南下政策を進め、インド到達計画の先鞭をつけた。1487年、バルトロメウ・ディアスは喜望峰を迂回し、92年コロンブスが新大陸を発見、94年スペインとトルデシヤス条約を締結したことでも知られる。左下角にあるのはマヌエル王100レイス十字架銀貨。下側中央の十字架金貨はジョアン3世(在位:1521年～1557年)による鑄造発行である。

再三登場する十字架の刻印の周囲に「IN HOC SIGNO



「東方三博士の礼拝」『国王マヌエル1世時祈祷書』(1517年～1530年)、87葉裏、国立古美術館所蔵。(Adoração dos Magos, O Livro de Horas de D.Manuel I Ôu, fl.87v, 1517-30, Museu Nacional de Arte Antiga)

VINCES(この印もて勝利せよ)」とあるが、紀元4世紀頃、イエエルサレム・ゴルゴタの丘で、ローマ帝国でキリスト教を公認したコンスタンティヌス大帝(在位:324～337)の母聖女ヘレナが十字架を発見したことから、十字架伝説が誕生し、ヤコブス・デ・ウォラギネ著『黄金伝説』(13世紀)にも記載がある。大帝の奇蹟物語は蛮族撃退に際して天使が夜中、彼の頭上に現れ、このお告げを授かり、見事に敵を敗走させた後、キリスト教に改宗したと伝える。下側右縁角の銀貨はさらにジョアン3世40レイス十字架銀貨。この国王はブラジルの植民活動の基礎を築き、またポルトガル・ルネサンス文化を開花させた文芸のパトロン(保護者)で、彼のお抱え宮廷画家グ

レゴリオ・ロベス(?~1550)は先代マヌエル王からこの要職を継承し、時祈傍書の挿絵を手がけたと言われている。

ここでの「この印もて勝利せよ」のエピソードは暗にルネサンスが古代古典文化の復興であること示すものであるが、中世地中海文明社会の十字軍の精神的基礎に触れるものであり、ポルトガルにあっては当然十字軍の申し子としてのレコンキスタを13世紀に達成し、14世紀中葉には王権神授説が既に確立し、強大な中央集権体制の下、宗教的に大航海時代の黎明を告げるものである。また同時代的にはまさに隆盛を極める海外進出のカトリックの原型の精髓を貨幣に刻み込んだといえる。さて、人文主義的教育分野で能力を発揮したポルトガル人として、ジョアン3世が率先して奨学生を送り込んだパリのサンタ・バルバラ学院長を務め、エラスムスと親交の深かったディオゴ・デ・ゴウヴェイアがいるが、学院で寝食をともにした2人の同窓生ザヴィエルとロヨラが神学の奥義を究めようとしていた。当時パリはカルヴィンの予定説を筆頭に宗教改革の嵐が吹き荒れていた。

各国語で聖書を翻訳する運動も盛んで、合わせて各国で自国語の認識を高める文法書が執筆される。ポルトガルにおいては、フェルナン・デ・オリヴェイラの『ポルトガル語文法』が先鞭をつけるもので、豪華絢爛なバロック文体で知られる大航海時代を歴史的に実証する『アジア史』の作者、人文主義者ジョアン・デ・バロスも文法書を上梓している。大航海時代のポルトガル人の足跡を古典作品を踏襲しながら、集大成したカモンイスの叙事詩『ルジアダス』(1572年)は一方で、近代ポルトガル語の礎を構築したものである。16世紀前半、宮廷戯作者ジル・ヴィセンテは海外進出によって噴き出す社会矛盾を宗教劇、社会諷刺劇などで酷評し、当代随一の金銀細工師としても令名を馳せたとと思われるが、ガマが帰還の際にもたらしたキロアの金を材料にマヌエル王の注文で制作した塔型「ベレンの聖体顕示台」(1506年、国立古美術館所蔵)はマヌエル様式の品格ある傑作である。彼の劇作品は中世から近世にかけての過渡期のポルトガル語であった。

さてもう一人教育者として忘れてはならないのは、ゴウヴェイア家のもう一人、アンドレである。モンテーニュが学んだポルドー・ギューエンヌ学院長であったが、国内の人文主義運動の拠点として1548年に創設されたコインブラ学芸学院で、帰国後院長に任じられることになる。ところが、パリで聖地への十字軍の計画実現を夢見た二人によって発足されたイエズス会は、もともと海外進出で嵩む膨大な借財に苦しむ宮廷が純粋に経済的理由から特にユダヤ人富裕層の財産を没収、彼らを国外追放する手段として合法化した異端審

問制度を思想統制の道具に利用することになり、1555年には自由な気風のコインブラ学芸学院を牛耳ることになる。出版の検閲制度も導入され、ジル・ヴィセンテの作品が発禁処分として「禁書目録」を飾ることになる。

このころ新参のイエズス会は、リジュボアの中世城壁の外側に位置するベストなど疫病患者の収容施設及び墓地教会として機能していた聖ロケ教会を、重要な維持資金源である疫病除け護符(お守り)などの販売権も含めて買収をはかろうとしていた。聖ロケ(ロクス)同様に黒死病除け聖者として知られる『聖セバステアヌスの殉教』を最高傑作とする宮廷画家グレゴリス・ロベスを後継する存在として、ジョアン3世肝煎りのお抱え奨学生としてイタリアに留学したガスパール・ディアスは帰国後、宮廷絵画審査官の要職を任せられる。彼の最も重要な作品とされる『聖ロケに天使現る』(1584年頃)は、胸に紅色十字架(ロクス)が刻印されて誕生した聖者が奇蹟的に指先でベストを治癒する能力を発揮するのであるが、それが逆に禍して、黒死病患者病院で自ら罹患して、病院を追放される。人里離れた森林で死期を待つところに見知らぬ猟犬が飼い主の家からこっそり運びだす食糧で延命している。作品は、畢竟天使の到来で治癒される劇的な瞬間を表現したものであり、イタリア仕込みの遠近法で3次元的なダイナミズムを生み出している。最早後期ルネサンスであり、既にバロック的感觉を内包していると言える。

こうして、大航海時代を色濃く反映したマヌエル様式をポルトガル・ルネサンスの独自の姿とした華麗なる繁栄の日々は、やがて落日を迎えるのである。



ガスパール・ディアス(帰属)「聖ロケに天使現る」(1584年頃)、リジュボア施療院/聖ロケ(ロクス)教会所蔵。 (“Aparição do anjo a S. Roque”, atribuída ao pintor português Gaspar Dias, c.1584, Santa Casa da Misericórdia de Lisboa / Museu de São Roque)